

他者による文章の適切な使用に関する大学生の知識

谷上亜紀

Aki Tanigami

滋賀大学 経済学部 / 准教授

I 問題

他者の著作物を不適切に使用する剽窃は、大学などの教育現場においても、大きな問題として教育上および研究上の注目を集めてきた。

とくに近年では、インターネットの普及に伴って手軽に入手できる資料が質・量ともに豊富になり、それらの一部をコピーして貼り付けるという安易な方法での剽窃が可能になった。こうした事情が大学生の剽窃をさらに増加させたという指摘がある（たとえばAustin & Brown, 1999）。この、インターネットを介した剽窃は“Internet plagiarism”（Austin & Brown, 1999）、“cyberplagiarism”（Anderson, 1999）、“mouse click plagiarism”（Auer & Krupar, 2001）、などと呼ばれる。

学生がなぜ剽窃を行うのかについては、いくつかの要因が指摘されている。

まず、剽窃に対する罪悪感の欠如が挙げられている。剽窃はカンニング等の不正行為の一つとされるが、そもそも大学生は学業に関連する不正全般に対して罪の意識が薄い傾向があることが指摘されている。Antenucci, Tackett, Wolf, & Claypool (2009) の研究では、不正行為に対して「大学を卒業するための正当な手段である」「授業料を払っているのだから」「他の人たちが見つからないのだから」といった正当化をする学生が珍しくないことが示された。不正行為の中でも、とくに剽窃に対する罪悪感は薄いようである。たとえばLim & See (2001) がシンガポールの学生を対象に行った調査では、書物や他の学生の書いたものから無断でコピーをして課題として提出することは、その他の不正な手段、たとえばカンニング、賄賂、仮病などよりも軽い問題であると捉えられていることが見出された。さらに、出典を記さずに他者

の著作物をコピーするという行為を見たことがあると報告した学生は85.5%にのぼった。

とくに、インターネットを通じた剽窃行為については、若い世代はインターネットを介した情報を出典に触れることなく切り貼りする行為に対して抵抗を感じない、あるいは不正であるという感覚すら持たない場合があることが指摘されている（詳しくはPark, 2003を参照のこと）。

次に、剽窃行為は大学生の学業成績や能力と関連があることが先行研究によって示されている。剽窃を行いやすい学生の特徴として、成績がふるわない、学業に自信がない、文章を書くのが得意でない、読解力に欠ける、等が挙げられている（詳しくはLiao & Tseng, 2010を参照のこと）。能力の不足のため、もはや正当な方法では課題を遂行することができない場合に、あるいは自らそう思い込んでいる場合に、罪悪感の薄さもあいまって、より一層の学業上の努力を行うよりも剽窃行為を選択する学生がいるということが示唆される。しかし、能力不足が原因で剽窃が結果であるというこの解釈とは異なる解釈も成り立つ。真の原因は能力ではなく、学生がもともと有している価値観や態度であり、これが学業と不正行為との両方に影響しているという解釈である。つまり、勤勉性や誠実さを軽んじるような姿勢が、一方では学業の不振をもたらし、一方では安易な不正行為をもたらしている場合もあるだろう。

さらに、これら以外の要因として、剽窃に関する知識の不足が指摘されている（たとえば、Liao & Tseng, 2010; Roig, 1997; 2001）。大学生は、他者に由来する文章の適切な使用と剽窃とを区別する基準について、そもそも十分な知識を有していないのかもしれない。そうであるならば、彼らが行う剽窃の中には、他者に由来する文章を正しく利用し

ているつもりで、結果的に剽窃を行ってしまっている場合が含まれている可能性がある。

他者由来の文章を用いる際には、それがごく一般的な知識であると広く認識されているような内容でないかぎり、出典を記さなければならない。その上で、もとの内容を要約したり、自分の言葉で言い換えたりする際にも、原典中の表現をたとえ一部であってもそのまま用いる場合には、直接的な引用の範囲は明確にしなければならない（たとえばRoig, 2006を参照のこと）。滋賀大学経済学部の1年次の必修科目である『大学入門セミナー』で用いられるテキスト『学修navi』でも、次のように記述されている。

- 他者に由来する素材をそれを明記せず用いれば、それは盗用・剽窃行為（他人の文章・文句等を無断で盗んであたかも自分のものであるかのように用いること）とみなされます。
- 引用：他者の表現をそのまま用いる場合には「 」で示す。そのままではなく自分で要約して示す場合にも、何らかの方法でその範囲を明らかにする。
- 他者の素材を用いる場合には、引用を明確に行い、必ず出典を明記しましょう。不適切な形式での引用や合理的な範囲を超える引用は、剽窃行為になります。なお、他者の表現を、文末表現を変えて用いたり、語順を変えて用いたとしても、その箇所全体をみたときに本質的に同じだといえる表現であれば、それはやはり剽窃です。（pp.42-43）

そして、1年次の学生は全員この部分を読んでいるはずである。それにもかかわらず、学生のレポート、卒業論文、修士論文等には、他者の文章を不適切に用いている例が頻繁にみられる。

他者の文章のかなりの量を出典を記さずに丸写ししているのは論外として、出典に言及していた場合でも、引用のしかたが適切でないものは少なくない。典型的であるのは、どこからどこまでが引用で、どこからが自分自身の記述であるのかが曖昧な部分が含まれるレポート・論文である。たとえば、部分的に見れば専門用語を多用した高度な内容が含まれているが、それらのつながりがどこか不自然であるような文章が、筆者自身の考察であるかのような表現で綴られており、最後に括弧つきで出典が示されているような例は頻繁に目にする。また、段落の最初に「○○によれば、・・・である」と、出典からの引用箇所がその「・・・」の部分に限定されているような記述が見られた後に、明らかにさらなる引用と思われる部分を含む文章が「」で括られることなく延々と続き、最後に「したがって・・・なのである」と筆者自身の結論のように締めくくられるといった例もしばしばみられる。

こうした例は、多くの学問分野において剽窃とされる。Howard(1993)は、「もとのテキストからコピーをし、それからいくつかの単語を消去し、文法構造を変えたり、一語一語を同意語で置き換えたものを差し挟んだり」した記述を“patchwriting”と呼び、「出典を記してはいるが、借用した語や句を示すための引用符を用いず、出典ときわめて類似した言い換えをする」ことは剽窃であると明確に述べている。また、Park(2003)は、学生の剽窃を4タイプに分類し、その一つとして「一つあるいはそれ以上のソースから題材を切り取ってちゃんとした文書であるかのように提出するが、引用符がなく、そのために、題材が直接的に引用されたのではなく言い換えがなされているという印象を与えるもの」を挙げている。Roig(2006)も、たとえ出典の著者名を記していても、引用符なしで部分的な引用を行えばそれは剽窃であると述べている。

これらの基準に従えば、先に述べたような例はまぎれもなく剽窃であるのだが、後を絶たない、というより、授業中に折にふれて指導する程度では焼け石に水のように感じられる。これは、学生たちのモラルの問題、つまり、よくないとは認識しているがこの程度は誰でもやっているので非難されるほどのことではないという彼らの意識を反映しているようにも思えるが、その根底には剽窃に関する知識の不十分さが存在するのかもしれない。つまり、彼らは『学修navi』で学んだことを早々に忘却し、「もともとは他者の文章であってもその一部を書き換えさえすれば自分のものとして公表しても問題ない」「出典を示しさえすれば、そこから引用したのがどの部分であるかは示さなくても問題ない」と半ば本気で信じるようになってしまうのかもしれない。

本研究では、滋賀大学経済学部学生における、他者由来の材料の適切な使用方法に関する知識を検討する。もし、大学生の知識が十分でなく、そのことが剽窃の一因となっているのであるとすれば、正しい引用のしかたについての知識を補うことで剽窃の発生を減少させることができるかもしれない。

Ryan, Bonanno, Krass, Scouller, & Smith(2009)は、剽窃に対しては、防止(prevention)、見破ること(detection)、罰則(penalty)の三側面からの対応が重要であると述べているが、このうち最も重要かつ効果的なのは防止であろう。教育によって剽窃を防止することができたなら、他の二つの方向からの対応の必要性は相対的に減る。提出されたレポートや論文が剽窃であるかどうかを確認するために費やす心的物理的な労力、さらには発覚した剽窃にどの程度厳しく対処するべきかを検討するために費やす心的物理的な労力は

相当に減少するはずで、これは教員にとってたいへんありがたいことである。

剽窃に関する大学生の知識を調べる方法は、いくつか考案されている。たとえばLiao & Tseng (2010) は、短い文章を剽窃にならないよう書き換えることを参加者に求めて、書き換えられた内容の分析を行った。また、Roig (1997) は大学生を、Roig (2001) は大学教員を対象に、短い文章とそれを書き換えた例を提示し、書き換え例が適切であるか剽窃にあたるかを判断するよう求めた。その結果、たとえばRoig(1997) では、引用や言い換えに関するアメリカの大学生の認識は全般に緩いこと、こうした緩さの程度と学業成績との間に負の相関がみられること、男子学生よりも女子学生のほうがより厳格に判断していることなどを見出した。

本研究では、Roig(1997; 2001)と同様、短い文章と、それをレポート等で使用する際の表現とを大学生の参加者に提示し、適切であるかを問うという方法を用いた。使用した文章は、ウェブサイト“Academic Integrity at MIT”の中の“Academic Writing—A Handbook for Students”におけるセクションの一つ“Avoiding Plagiarism — Paraphrasing”において、“Exactly what does “paraphrase” mean?”という見出しをつけられた解説の中で用いられていた文章例の日本語訳、およびそれを改変した文章である。

“Exactly what does “paraphrase” mean?”では、短い文章が1つ、およびその使用例2つが示されている。これらを以下に示す。

もとの文章：“Because of their unique perspective, Americans fear globalization less than anyone else, and as a consequence they think about it less than anyone else. When Americans do think about globalization, they think of the global economy as an enlarged

version of the American economy. (Source: Thurow, L. (1993). *Fortune Favors the Bold* (p. 6). New York: Harper Collins.)” (以後「もとの文章」とする。)

使用例1：“According to Lester Thurow(1993) Americans *fear globalization less* than people from other countries and *as a consequence spend less time thinking about it*. Indeed, Americans see globalization *as an enlarged version of their own economy*.” これは、出典は明示されているものの、もとの文章のいくつかの部分と同じ意味の表現で置き換えただけでそのまま使用しているとみなされること、また原典中の表現(文中の太字部分)を引用符で括ることなく使用していることから、剽窃にあたりと解説されている(以後この例文を「引用符なしの原典使用例」とする)。

使用例2：“Lester Thurow (1993) maintains that because Americans see globalization simply as a bigger form of their own economy, they are less concerned about it than is the rest of the world.” この例では、引用元が明示された上で、意味内容はもとの文章とほぼ同じであるが表現および使用される単語がもとの文章とは異なるよう書き換えられているので「書き換え」(“paraphrasing”)にあたり、剽窃ではない(“acceptable”)と解説されている(以後「適切な書き換え例」とする)。

本研究ではこれら3つの文章の日本語訳に加えて、もう一つ文章を用意した。使用例1(「引用符なしの原典使用」)中の、本来ならば引用符で括るべき部分、つまり原典の表現をそのまま用いた部分を「」で囲んだ例である(以後「引用符を用いた原典使用例」とする)。

そして、これら3つの例の各々について、それが剽窃にあたるか適切な使用であるかを問うた。も

し、参加者が剽窃について十分な知識を有しているならば、「引用符なしの原典使用例」に対しては剽窃であると答え、「引用符を用いた原典使用例」および「適切な書き換え例」に対しては適切であると答えるはずである。

また、本研究では提示順序の影響を考慮して材料の提示順を2種類設定した。

日頃から先行研究を数多く参照し引用する習慣があり、そうした作法に則った研究論文を読むことの多い大学教員と異なり、大学生には、他者に由来する文章を引用している著作物を目にする機会がそう多くはないと推測される。とくに直接「」で囲うという形での引用に出会うことは、小説をはじめとする一般向けの書籍に限られた読書経験の中ではかなり珍しいであろう。したがって、情報としては聞いたことがあっても、引用を含んだ文章を実際にはあまり見たことがない学生もいると思われる。そうした学生にとっては、最初に「引用符を用いた原典使用例」を提示されることによって適切な引用方法に実際に触れる経験が一つ増えることになり、その結果、その後提示される「引用符なしの原典使用例」に対して、それが不適切であると認識できる可能性が高まるかもしれない。

このことを検討するため、「引用符なしの原典使用例」→「引用符を用いた原典使用例」の順で提示する群と、「引用符を用いた原典使用例」→「引用符なしの原典使用例」の順で提示する群とを設けた。いずれの群でも「適切な書き換え例」は最後に提示した。

II 方法

調査参加者 滋賀大学経済学部の学生106名。

材料 5枚からなる調査用紙を作成した。1枚目は表紙であり、2枚目には以下のような説明を記

した。

「レポート・論文等において他者の文章を使用する際には、それが不正にあたらないよう注意する必要があります。この調査では、このことに関するみなさんの意識をお尋ねします。各ページに、オリジナルの文章と、それをレポート・論文で使用の際の書き換えの例が載っています。書き換えは『パターン1』から『パターン3』まで3つありますが、もとの文章はすべて共通です。具体的には、1ページ目には、オリジナルの文章と『パターン1』が、2ページ目には、オリジナルの文章と『パターン2』が、3ページ目には、オリジナルの文章と『パターン3』が、それぞれ印刷されています。それぞれをよく読んで、A 原典の文章は適切に使用されている、B どちらともいえない、C 不正にあたる、のA、B、C どれか一つの記号に丸印をつけてください。目的は調査に協力していただくことであってみなさんを評価することではありませんので、率直にお答えください。」

続いて3、4、および5ページ目には、1ページにつき、もとの文章、およびその使用例の1つが印刷されていた。各文章は、前述のとおり“Academic Integrity at MIT”内の例を日本語訳した文章（「もとの文章」「引用符なしの原典使用例」「適切な書き換え例」）および、「引用符なしの原文使用例」の直接的な引用部分を「」で括り、文章の流れを考慮して細部に変更を加えたもの（「引用符を用いた原典使用例」）であった。

実際に使用した文章は以下のとおりである。

「もとの文章」：「アメリカ人は独特な考え方をしているので、他の誰よりもグローバル化を恐れていないし、その結果、それについて考えることが他の誰よりも少ない。アメリカ人がグローバル化について考えるときには、彼らはグローバルな経済をアメリカ経済のひとつの拡張版であるとみなしている。

出典：Thurow, L. (1993). *Fortune Favors the Bold* (p. 6)]

「引用符なしの原典使用例」：「Thurow (1993) によれば、アメリカ人は他の国々の人々よりもグローバル化を恐れていないし、その結果、それについて考えるのに費やす時間もより短いという。実際、アメリカ人はグローバル化を彼ら自身の経済のひとつの拡張版であると考えているのだ。」

文章中の太字部分は“Academic Integrity at MIT”内の例において太字で示された部分、つまり剽窃にあたりとされた部分である。なお、実際に参加者に提示した文章では太字は用いていない。「引用符を用いた原典使用例」：「Thurow (1993) によれば、アメリカ人は他の国々の人々よりも「グローバル化を恐れていない」ために「それについて考えること」に費やす時間もより短いという。彼は、アメリカ人はグローバル化を「アメリカ経済のひとつの拡張版」とみなしていると指摘する。」

「適切な書き換え例」：「Lester Thurow (1993) は、アメリカ人はグローバル化をただ単に、彼ら自身の経済のより大きな一形態であるとみなしており、それに対する関心が世界の他の人々と比べて薄い、と述べている。」

手続き 調査は講義時間中に行った。調査用紙を配布した後に、目的を説明し、2枚目に記された説明を読み上げた。そして、協力するか否かは各参加者の意志に任せる旨を伝えた。

協力すると決めた参加者は、指示に応じて教示文を読み、半数は「引用符なしの原典使用例」→「引用符を用いた原典使用例」→「適切な書き換え例」の順に、もう半数は、「引用符を用いた原典使用例」→「引用符なしの原典使用例」→「適切な書き換え例」の順に、自分のペースで課題を進めた。

最後に、今回使用した3つの引用方法について、それぞれが一般的な基準に照らして適切であるか

否かを、適切な引用についての解説も含め説明して終了した。

Ⅲ 結果と考察

例文間の比較

例文の種類ごとに「原典の文章は適切に使用されている」「どちらともいえない」「不正にあたる」と答えた人数を百分率で示したものがFigure 1である。

ここでは、“Academic Integrity at MIT”に倣い、「引用符なしの原典使用例」については「不正にあたる」を適切な選択肢とし、「引用符を用いた原典使用例」および「適切な書き換え例」については「原典の文章は適切に使用されている」を適切な選択肢とする。

「引用符なしの原典使用例」については、「どちらともいえない」を選んだ参加者が最も多く35.8% (38人) であり、適切な選択肢である「不正にあたる」を選んだ参加者と、誤った選択肢である「適切に使用されている」を選んだ参加者が同数で32.1% (34人) であった。Roig (1997) の研究でも本調査と同様、引用元は明記しつつも原典中の表現を引用符を用いずに使っている例に対して、正しく「剽窃である」とした大学生は39%と少なく、「剽窃ではない」の57%を下回っていた。この結果についてRoig (1997) は、大学生は引用元が書かれているかどうかを剽窃か否かの拠り所にしており、つまり、引用元が記されてさえいれば他者の文章をどう用いようと剽窃にはならないと考えているのではないかと推測している。このことから考えると、もし、用いた例が引用元についての記述を欠いていたならば、これを不適切とする参加者はより多く、適切とする参加者はより少ないという結果になっていたかもしれない。

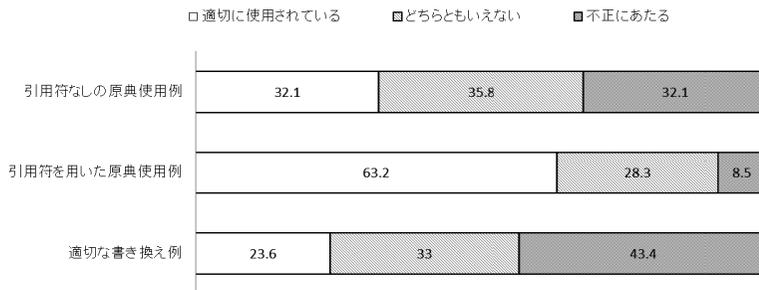


figure 1. 使用例の種類ごとにみた選択 (%)

「引用符を用いた原典使用例」については、正答つまり「適切に使用されている」を選択したのは63.2% (67人) であり、「どちらともいえない」が28.3% (30人)、誤った選択肢である「不正にあたる」は8.5% (9人) と少なかった。

「引用符なしの原典使用例」と「引用符を用いた原典使用例」は、文章そのものは細部を除き同一であり、主要な違いは原典からの引用部分に「」を用いているかどうかである。この両者間で参加者の回答に偏りがみられるかどうかを比較するためにカイ二乗検定を行ったところ、偏りは有意であった ($\chi^2(2) = 14.50, p < .01$)。残差分析の結果、「適切に使用されている」という回答と「不正にあたる」という回答の2つに差がみられた (調整残差はそれぞれ4.54, $p < .01$, 5.27, $p < .01$)。つまり、「適切に使用されている」という回答は「引用符を用いた原文使用例」のほうが多く、「不正にあたる」という回答は「引用符なしの原典使用例」のほうが多かった。このことは、相対的に見れば参加者たちの判断は妥当であることを示唆する。しかしそれでも、本来は不正にあたる「引用符なしの原典使用例」について3割以上の参加者が適切であると認

識しており、全体としてみると彼らの剽窃の基準は緩いといえる。

“Academic Integrity at MIT” では “acceptable” とされている「適切な書き換え例」については、「適切に使用されている」を選んだ参加者が23.6% (25人) と、「不正にあたる」の43.4% (46人) を下回った。この文章は、もとの文章の意味内容は保ちつつ用語や表現を十分に变えており、適切な要約あるいは言い換えとされる条件を満たしている (たとえばRoig, 2006を参照)。それにもかかわらず、これを適切であるとする判断は少なかった。実際に不適切な例である「引用符なしの原典使用例」と比較しても、両者に対する「適切」「どちらともいえない」「不正」の率には差がなかった ($\chi^2(2) = 1.83, n.s.$)。不正であると考えた参加者が多かった理由は定かではないが、もしかしたら彼らは、もとの文章を大幅に書き換えた場合は引用元に言及することは不要と考えており、そのために、わざわざ著者名を記している「適切な書き換え例」は却って不自然で不適切に感じられたのかもしれない。本調査では、参加者には選択肢に丸をつけることのみを求め、そのように判断した理由を問うことはしなかったが、選択の理由につ

いての自由記述回答を求めていたならば何らかの示唆が得られていたかもしれない。

参加者ごとにみると、「引用符なしの原典使用例」と「引用符を用いた原典使用例」の両方に対して正しく選択した参加者、つまり、引用元の文章そのままの表現は「」で括るのが正しく括らないのは正しくないということを理解していると思われる参加者は18.9% (20人) であった。また、「適切な書き換え例」を加えた3つの使用例すべてに対して正答を示したのは3.7% (4人) であった。

提示順序の影響

「引用符なしの原典使用例」を、最初に提示した条件と、「引用符を用いた原典使用例」の後で提示した条件のそれぞれについての結果をFigure 2-1に示した。引用符を用いた正しい引用方法が前もって提示された場合には、引用符なしの使用が誤りであると気づく率が高くなるかもしれない、つまり、「不正にあたる」という選択肢はより多く、「適切に使用されている」という選択肢はより少なくなると予測したが、実際には、数値上はそのような傾向は見られるものの(「適切に使用されている」は、それぞれ37.3%、27.3%)、統計的には2つの条件の間に違いはみられなかった ($\chi^2(2) = 1.21$,

n.s.)。つまり、「」つきの引用を一度目にするだけで呼び起されるような知識を潜在的に有している学生がいることは、今回の調査では確認されなかったといえる。

同様に、「引用符を用いた原典使用例」(Figure 2-2)、「適切な書き換え例」(Figure 2-3)のいずれについても、提示順序の影響はみられなかった(それぞれ、 $\chi^2(2) = 2.07$, n.s., $\chi^2(2) = 1.01$, n.s.)。

提示順序の効果がみられなかったことには、もしかしたら、「どちらともいえない」という選択肢を設定したことが関係しているかもしれない。図から明らかなように、「どちらともいえない」という選択肢を選んだ参加者の割合はかなり高い。この中には、「おそらく適切であると思うが確信が持てない」あるいは、「おそらく不正にあたると思うが確信が持てない」ために「どちらともいえない」を選択した参加者も含まれているであろう。もし、曖昧な選択肢を省いたならば、条件間の比較についてより詳細な情報が得られたかもしれない。

また、今回は回答の選択のみを参加者に求めたが、それぞれの判断に関して確信度の評定を求めることでより多くの情報が得られたかもしれない。同様な調査を再度行う際には、これらの点に留意したい。

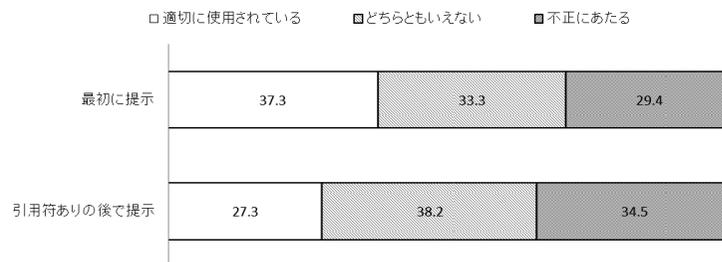


figure 2-1. 「引用符なしの原典使用例」に対する提示順序の効果 (%)

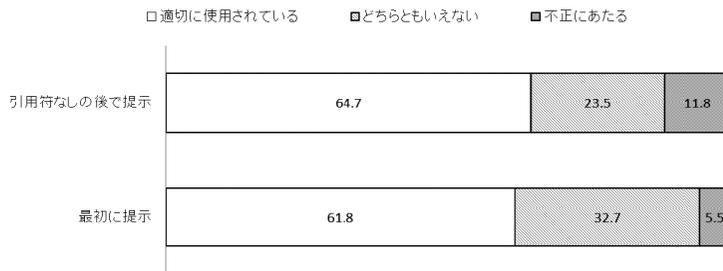


figure 2-2. 「引用符ありの原点使用例」に対する提示順序の効果 (%)

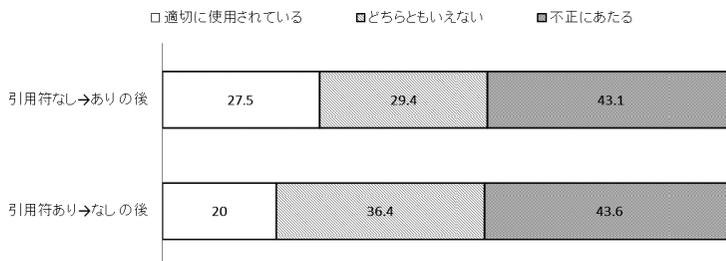


figure 2-3. 「適切な書き換え」に対する提示順序の効果 (%)

IV 一般的考察

他者の文章の適切な使用に関する滋賀大学経済学部学生の知識はけっして十分ではないことが示された。今回の調査参加者の3割以上が、引用の範囲を明確にせず、他者由来の文章を用いることを適切と判断し、4割以上がもとの文の内容は保持しつつ表現を変えて出典を明記した使用例を不適切と判断した。この結果は、「出典を記しさえすれば、どこからどこまでが他者由来の文章であるか明確にする必要はない」という信念を有する学生が3割以上、「もとの文章を自分の表現に書き直すならば出典を示す必要はなく、著者の主張を自分のものであるとしても差し支えない」という信念を有しているかもしれない学生が4割以上

存在することを示唆する。また、3つの例すべてに対して妥当な判断を示した学生、つまりある程度十分な知識を有していると推測される学生は3.7% (4/106人) と少数であった。さらに、いずれの書き換え例に関しても「どちらともいえない」という選択肢がかなり多く、剽窃にあたるか否かという基準が曖昧な学生が相当数いることも示された。つまり、他者由来の文章を接ぎ合わせて、あたかも一から自分が考えた内容であるかのように提出されるレポート・論文の背景には、他者の文章の適切な使用方法を知らない学生が思いのほか多いという事情があるという可能性が示された。この結果からは、多くの学生は、ちょっとした剽窃を意図せずに行ってしまう危険とつねに隣り合わせであるということが示唆される。

結果を解釈する上で留意すべきことは、本調査で用いた「引用符なしの原典使用例」においては、もとの文章と完全に一致する部分はそれほど多くなかったということである。もし、もとの文章からの借用部分をさらに増やしていたならば、つまり剽窃部分が増えたとすれば、剽窃であると判断される率はもっと高かったのだろうか。今回用いた材料に関して、本来は適切でない引用のしかたではあるが、数が少ないので許容範囲であろうと考えた参加者もいた可能性はある。この点は、もう一度検討する必要があるかもしれない。

前述のように、剽窃への対応としては、その防止に力点を置くことが重要であると思われる。大学生の剽窃防止のために教員が行い得る試みとして、Austin & Brown (1999) は、たとえば、学生がレポートを書く場に立ち会う、剽窃では解決できないような課題を出す、学生との間によい関係を築いて学生が責任感を持てるように導く、剽窃が発覚した際の罰則について事前によく説明する、などを提案している。これらはいわば剽窃を行うことへのハードルを高くするための、学生の内的(心理的)・外的(物理的)な環境の整備とみなすことができるが、これらに加えて、本研究からは、そもそものような行為が剽窃とみなされるのかについての学生の認識を向上させることの必要性が示された。

ところで、正しい知識を大学生にしっかりと伝えたならばほんとうに剽窃は減るのだろうか。先に述べたように、剽窃には罪の意識の薄さ、学業上の困難等様々な要因が関係していると考えられる。無知による剽窃は、無知が解消されたらそれに伴って消滅するはずなのだが、一人の学生が剽窃を行う理由は一つではないかもしれない、その場合は期待するほどの効果がみられないかもしれない。

この問題、つまり教育の効果についてはいくつか知見がある。たとえばLaw, Ting, & Jerome (2013) は、適切な引用のしかた等についての説明を含む“Academic Reading and Writing course”と名づけられた14週間にわたる講義を受ける前と受けた後(正確には最初から2回目の講義と最後から2回目の講義)で、剽窃行為の頻度や剽窃に対する大学生の態度が変化するかどうかを検討した。受講した大学生たちの自己報告によれば、講義の実施後には剽窃行為が減少し、適切な引用が増加した。

学生の自己報告ではなく客観的な尺度を用いた研究もある。Belter & du Pré(2009) は、ウェブサイト上に、剽窃の定義やそれを避ける方法についての説明を含む“academic integrity module”という教育プログラムを作成し、そこでの設問に100%正答するまで学習を続けることを学生に求めた。その結果、このプログラムが作られる前の学期に授業を受けた学生がレポートで剽窃を示した率は25.8%であったのに対し、このプログラムを受けた学生では6.5%と、剽窃は明らかに減少した。またHolt(2012) は、剽窃の定義や事例、適切な引用や言い換えの方法等を教えられ、そのスキルを向上させるような課題を与えられたクラス(訓練群)と、そうでないクラス(非訓練群)とを設けて、大学生の剽窃に関する知識が学期の始まりと終わりで変化するかどうかを検討した。その結果、提示された段落が剽窃か否かを正しく判断する課題において、非訓練群ではほとんど成績の改善が見られなかったのに対し、訓練群では明らかな向上がみられた。とくに、最初は剽窃ではないと誤って判断される率の高かった、“patchwriting”に対する正答率、および、うまく言い換えられてはいるが出典が示されていない例に対しての正答率が著しく上昇した。

これらの研究は、教育が剽窃の減少につながる可能性を強く示唆する。

さらに、剽窃に関する学生たちの知識を確かなものにするためには、一方的に解説を与えるのみでは十分ではないという指摘もある。

Howard(1993)は、大学生が行う“patchwriting”は、専門的な概念や用語などを理解しようとする努力の反映であり、倫理に反する剽窃とは異なるとして、大学生のpatchwriting”を擁護する立場を取っている。その上で、剽窃を避けるためのより具体的な方法、たとえば、他者の文章を要約する際にはそれを読んでから自らの表現で書き直すまでに一定の時間を置く、書き換えの際にはもとの文章を見ないようにする、自らが書いた文章を注意深く読み返す、などのいわばメタ認知的な方略を指導することを提案している。また、Holt(2012)は、自分自身の書いた文章が剽窃にあたるか否かを理解させるため、学生たちに、通常は教員側が使用する、剽窃を発見するアプリケーションを使わせるといったより実践的な方法を提案している。

Howard(1993)の考え方に倣うならば、剽窃は罰すべき行為というよりも学生の未熟さと教員の指導不足を示す現象であり、教育のよい機会である。学生の倫理観に対して大学教員ができる貢献は大きくないかもしれないが、レポート・論文を適切に作成する能力を向上させるための指導において教員が担いうる役割は大きい。

ところで、他者の著作の使用に関して、指導を行う側である教員の認識は十分なのだろうか。

Roig(2001)は、大学教員に引用元の文章とその使用例6つを提示し、それぞれについて、剽窃にあたる、そうではない、判断できないの選択肢の一つを選ぶことを求めて、この問題を検討した。提示した6例のうち4例は剽窃、2例は妥当な書き換え例であった。その結果、4つの剽窃例に対して「剽

窃である」を選んだ率は、それぞれ92%、83%、81%、48%、また、2つの適切な書き換え例に対して「剽窃ではない」を選んだ率はそれぞれ94%、91%であり、すべての教員の判断が一致した例はなかった。つまり、大学教員の間でも、剽窃を判断する基準は必ずしも一致していない。

このうち、剽窃とされる例であるにもかかわらず「剽窃である」の選択率が48%と低かった例は、出典が示されてはいるものの文単位での丸写しを含んだ例である。この調査では、大学生を対象に行ったRoig(1997)の調査と同じ材料を用いているため、この例に対する大学生との比較が可能である。Roig(1997)において、この例に対して適切に「剽窃である」と答えた大学生は19%であり、大学教員の48%は、教員のほうが学生と比べてより確かな知識を有していることを示している。しかし、それでも、論文執筆のためのマニュアルでは明確に剽窃とされるような例に対して、44%もの教員が「剽窃ではない」と答えているということは、少なからぬ教員が、同業者に剽窃とみなされるような事態を招きかねない基準を有していることを示唆するとRoig(2001)は指摘する。

教員間に見られる認識の違いは、研究領域と関連するのであろうか。Roig(2001)は、調査対象の大学教員の研究領域を、経営、社会科学、人文科学、科学等に分類し、それらの中で判断の違いがあるかどうかを分析したが、差は有意ではなかった。しかし、研究領域による判断の違いを見出した研究もある。Julliard(1994)では、出典を明示してはいるものの、もとの文章の55語中48語を引用符をつけずに借用している明らかな剽窃例に対して、剽窃ではないと答えた率は、大学の英語教員では8%であったが、医学研究者では67%にのぼった。興味深いことに、医学部所属であっても研究者ではなく学生による判断では、剽窃でない

答えた率は32%と研究者を下回り、このことは、専門領域に馴染むにつれて学生たちの剽窃の基準が逆に緩んでゆくことを示唆している。

これらの研究からは、大学教員が個々に有する剽窃か否かの基準には個人差や研究領域による違いがあること、大学教員の基準は大学生よりは厳格な場合もあるが、逆に緩い場合もあり、大学教員の知識や認識も標準的な剽窃の基準に照らして十分であるとはいえないことが示唆された。指導にあたって、教員間で剽窃の基準や指導内容、評価等が異なっていれば、学生の間に混乱と不満が生じる可能性がある。まずは教員間で剽窃の定義、判断基準等を一致させておく必要があるだろう。

引用文献

- Anderson, G. L. (1999). Cyberplagiarism. *College & Research Libraries News*, 60, 371-373, 394.
- Antenucci, J., Tackett, J., Wolf, F., & Claypoold, G. A. (2009). The rationalization of academic dishonesty in business students. *Journal of Business and Accounting*, 2, 77-92.
- Auer, N. J. & Kruper, E. M. (2001). Mouse click plagiarism: The role of technology in plagiarism and the librarian's role in combating it. *Library Trends*, 49, 415-433.
- Austin & Brown (1999). Internet plagiarism. *The Internet and Higher education*, 2, 21-33.
- Belter, R. W. & du Pré, A. (2009). A strategy to reduce plagiarism in an undergraduate course. *Teaching of Psychology*, 36, 257-261.
- Holt, E. A. (2012). Education improves plagiarism detection by biology undergraduates. *BioScience*, 62, 585-592.
- Howard, R.M.(1993). A plagiarism *pentimento*. *Journal of Teaching Writing*, 11, 233-246.
- Julliard, K. (1994). Perceptions of plagiarism in the use of other author's language. *Family Medicine*, 26, 356-360.
- Law, L., Ting, S., & Jerome, C. (2013). Cognitive dissonance in dealing with plagiarism in academic writing. *Procedia – Social and Behavioral Sciences*, 97, 278-284.
- Liao, M., & Tseng, C. (2010). Students' behaviors and views of paraphrasing and plagiarism in an FEL academic setting. *Pan-Pacific Association of Applied Linguistics*, 14, 171-193.
- Lim, V. K. G., & See, S. K. B. (2001). Attitudes towards, and intentions to report, academic cheating among students in Singapore. *Ethics and Behavior*, 11, 261-275.
- Massachusetts Institute of Technology. Academic Integrity at MIT – A Handbook for students. <https://integrity.mit.edu/academic-writing/avoiding-plagiarism-paraphrasing> (2014年7月時点)
- Park, C. (2003). In other (people's) words: plagiarism by university students – literature and lessons. *Assessment & Evaluation in Higher Education*, 28, 471-488.
- Roig, M. (2006). Avoiding plagiarism, self-plagiarism, and other questionable writing practices: A guide to ethical writing.
- <http://www.cse.msu.edu/~alexliu/plagiarism.pdf#search=Avoiding+plagiarism%2C+selfplagiarism%2C+and+other+questionable+writing+practices+Roig>. (2014年7月時点)
- Roig, M.(2001). Plagiarism and paraphrasing criteria of college and university professors. *Ethics & Behavior*, 11, 307-323.
- Roig, M. (1997). Can undergraduate students determine whether text has been plagiarized? *Psychological Record*, 47, 113-122.
- Ryan, G., Bonanno, H., Krass, I., Scouller, K., & Smith, L. (2009). Undergraduate and postgraduate pharmacy students' perceptions of plagiarism and academic honesty. *American Journal of Pharmaceutical Education*, 73, Article 105.
- 滋賀大学経済学部 (2014). 経済学部学修navi—大学入門セミナー共通講義テキスト2014.

Students' Knowledge of the Appropriate Use of Authors' Work

Aki Tanigami

Plagiarism, one aspect of academic dishonesty, is a serious problem and becoming more common in higher education. This study examined undergraduate students at the faculty of economics, Shiga University, on their knowledge of plagiarism. A total of 106 undergraduate students were presented with an original paragraph and three rewritten versions of the original paragraph, one of which was considered plagiarized according to published guidelines because it included strings of words copied directly from the original text with proper citation but without quotation marks; another of which was considered acceptable because quotation marks were placed around the words copied from the original text with proper citation; and the third was also considered acceptable because the original text was properly paraphrased without copying exact words or structure accompanied by proper attribution. The students were asked to compare each rewritten version of the paragraph to the original text and identify whether each version was acceptable (not plagiarized), indeterminable, or inappropriate (plagiarized). The results suggested that the students' knowledge of proper ways of citing and paraphrasing the original text was insufficient and that their criteria for distinguishing plagiarism and appropriate citations were ambiguous. These findings suggest that some students would commit plagiarism unintentionally because

they do not understand what plagiarism is. Instruction on quotation and paraphrasing seems to reduce the incidence of students' plagiarism resulting from their ignorance.

